

足立区環境基金審査会

議事録

令和7年2月3日

【環境基金審査会】会議概要

会 議 名	足立区環境基金審査会				
事 務 局	環境部長・荒井 広幸、環境政策課長・吉尾 文彦				
開催年月日	令和7年2月3日（月）				
開催時間	9時00分から11時30分まで				
開催場所	足立区役所 1205A会議室				
出席者 (※オンライン参加)	倉阪 秀史	※袖野 玲子	石毛 かずあき	佐藤 あい	岡田 将和
	茂木 福美	※舟山 奈緒子			
欠 席 者	町田 怜子、永野 充				
会議次第	別紙のとおり				
資 料	足立区環境基金審査会資料				
そ の 他					

(吉尾文彦 環境政策課長)

環境政策課長の吉尾でございます。

ただいまから足立区環境基金審査会を開催いたします。

審査会は、会場とオンラインを併用した会議となっております。

ご発言の際は、なるべくゆっくり、はっきりを意識していただきますようご協力をお願いします。

オンラインでご参加の委員の方がご意見、ご質問等ある場合は、挙手ボタンでお知らせください。会場参加の委員の方は挙手をいただき、進行いただく会長から指名いたします。

また今回の審査会も、ペーパーレス化を目的とし、配布資料をタブレットで共有しています。お一人につき2台机の上に置かせていただいております。1台は資料確認用として、残りの1台は審査用としてお使いいただきます。ご不明な点がございましたら、職員が控えておりますのでお声がけをお願いいたします。

それでは、倉阪会長、よろしくお願いします。

(倉阪秀史 会長)

倉阪でございます。よろしくお願いします。

それではただいまから足立区の環境基金審査会を開会いたします。

ファーストステップ一般助成それぞれ審査していただいて、足立区の区民のために、環境活動を促進していくということで審査をいただければと思います。本日は、定員9人のところ7人の委員の方に出席していただいております。したがって、会議が成立しているということを確認したいと思います。

本日の議事録署名人については会場にお越しいただいております石毛委員と佐藤委員にお願いしたいと思いますのでよろしくお願いします。

続いて次第の3、資料の確認、会議公開の取り扱いについて、事務局からお願いいたします。

(吉尾文彦 環境政策課長)

はい。それでは資料の確認です。

事前にお送りした資料またはタブレットに共有している資料として本日の次第。続きまして、委員の名簿、そして、環境基金申請一覧でございます。そして評価の考え方と、採択の基準、評価項目シート、そして申請書類3団体部分でございます。

続きまして、会議公開規定の取り扱いについてです。

足立区環境基本条例の規定により、審査会の会議は公開とする。議決があったときは公開とすることができるとなっております。前回までの審査会では審査内容を評価審査することは公開になじまないことや、公開とすることで、申請者が傍聴する可能性も出てしまうことから、審査に関する部分は非公開とすることを決定しております。今回の審査会においても引き続き審査は非公開とさせていただくということでよろしいか、確認いただきたいと思います。

(倉阪秀史 会長)

はい。ただいま事務局から説明があったとおり、この審査会において、審査の過程のところは従来から非公開とさせていただいております。

ただ一般助成の申請については、申請者のプレゼンテーションと質疑応答

までは従来も公開をしておりましたので今回も従来のやり方に沿って進めたいというふうに思っております。すなわち、申請者のプレゼンテーション、質疑応答まで公開その後の審査は非公開とし、ファーストステップ助成の書類審査については非公開という形にしたいと思いますが、ご意見ありますでしょうか。

(異議なし)

それでは今説明させていただいたとおりの形で進めたいと思いますのでよろしく願います。

(吉尾文彦 環境政策課長)

はい。ありがとうございます。

事務局からは以上でございます。

(倉阪秀史 会長)

はい。それでは次第の 4、審議の諮問について、事務局から願います。

(荒井広幸 環境部長)

はい。それでは私の方から代読をさせていただきます、諮問書をお渡しさせていただきます。

(諮問書 朗読)

よろしく願います。

(倉阪秀史 会長)

はい。ただいま近藤区長から諮問をいただきましたのでそれに従って、審査をしていきたいと思います。

本日は 3 件の申請について審査をしたいと思います。

次第の 5、評価の考え方と採択の基準について、事務局から説明をお願いします。

(吉尾文彦 環境政策課長)

はい。それではまず、本日の評価方法についてご説明いたします。評価の考え方と採択の基準をご覧ください。

申請は一般助成とファーストステップ助成に分かれます。今回は一般助成の申請が 2 件、ファーストステップ助成の申請が 1 件ございました。ファーストステップ助成は書類のみの審査、一般助成はプレゼンテーションと質疑応答がございます。今回は 2 件の申請、どちらも区が設定する課題対応型部門への申請となります。

ファーストステップ助成、一般助成それぞれの評価のポイントは記載のとおりでございます。

次に評価項目シートをご覧ください。全部で 8 項目を 0 から 5 までの 6 段階で評価します。3 以上の評価であれば、審査項目は基準を満たしていると判断されます。評価項目のうち 6 項目は共通で 2 項目は助成部門ごとに異なります。

評価コメント欄には活動内容と活動経費の視点から、評価をする理由や評価しない理由、または疑問点や条件をつけたことなどのコメントを記入ください。

採択不採択をご検討いただく際に使用いたします。審査は会場でご参加の委員はタブレットから入力を行っていただきます。

オンラインでご参加の委員につきましては、事前にお送りいたしました URL からアクセスをして入力をお願いしたいと思います。

次に採択について説明いたします。集計作業終了後、評価の集計結果とコメントをスクリーン上に投影します。その結果を踏まえ、各申請について一件ずつ協議いただき、採択不採択を決定していただきます。

採択の目安は全委員の合計が 6 割以上、つまり平均 3 以上の評価としますが、例

えば、5 割以下の点数をつけた委員がいる場合など、評価にばらつきがある場合は、協議の上採択不採択を決定していただきます。

また、活動の一部のみを認めることや、助成金の使途を限定するなどの条件を付けたときは、皆様のコメント欄を考慮して、協議の上決定していただきたいと思います。

中には審査が難しいこともあるかもしれませんが、公費を使つての助成でございます。学識、区議会、区民それぞれのお立場や視点で審査をお願いいたします。

以上、事務局案について説明いたしました。

（倉阪秀史 会長）

ありがとうございます。

それぞれ部門のところだけ異なる項目、項目1から6までは同じ項目になります。

それぞれ評価を0から5までつけていただくということになります。

平均3以上で、採択不採択を決めていくということですが、単純平均で決めるということではなくて、意見のばらつきがあった場合には、議論をして決めるという形にしていきたいというふうに思っております。

評価、採択について、ご意見やご質問があればお願いします。

（異議なし）

ありがとうございます。それでは、評価と採択の基準は、事務局案のとおりで進めさせていただきます。

審査に移る前に一点確認をいたします。委員の皆様の中に、本日の申請者と利害関係のある方がいらっしゃいましたら、挙手をお願いします。

（挙手なし）

利害関係者なしと確認しました。

それでは、それでは次第の6、評価の入力方法についてお願いします。

（吉尾文彦 環境政策課長）

はい。評価の入力についてご説明いたします。

会場の本日の皆様は評価入力用のタブレットから行ってきたいと思います。机の上に、審査入力用ガイドを配付してございますので、ご覧いただきながら入力をお願い致します。不明点などございましたらお声掛けいただければと思います。

続いてオンラインでのご参加の方は事前にお送りしておりますURLから入力をお願いいたします。

一般助成とファーストステップ助成の審査フォームをそれぞれ設けておりますので、入力の際は、お間違いのないようご注意ください。

一般助成は2件申請がございます。1件ごとに審議を行った後入力を行っていただく時間を設けてございます。

不明な点がございましたら事務局にお声掛けいただければと思います。事務局からは以上でございます。

（倉阪秀史 会長）

はいありがとうございます。何か入力の過程でわからなければ事務局の方に聞いていただければと思います。

それでは次第の7、一般助成申請者のプレゼンテーションに進みます。プレゼンテーションと質疑の後、1件ごとに意見交換を行います。

2件の申請について事務局から概要の説明をお願いいたします。

（吉尾文彦 環境政策課長）

はい。事務局でございます。

概要説明に入る前に、企業からの申請

に対する環境基金助成の考え方についてご説明させていただきます。

今回、一般助成Aに区内企業2社から申請が出されております。

いずれも環境への意識が高く、環境配慮型の商品やサービスを行う企業であり、既存事業をベースとした新たな取り組みに関する申請となっております。

企業からの申請で自社商品の販売促進や営業に繋がる要素を含む活動を助成対象と見ることができるのかという疑問をお持ちの委員の方もいらっしゃるかと思いますので、その点についてご説明させていただきます。

企業から環境貢献を目的とした新たなサービスの展開や新商品の開発に必要な経費を申請することは、環境基金助成の要綱上認められてございます。

ただし当然のことながら、基本的な要件である、新規性や拡充性、そして区民への環境効果、啓発効果などは他の申請と同様に求めるということになります。

経費につきましては、新規拡充部分のみが対象となります。

例えば情報発信に係る経費を環境基金の対象経費として計上する場合、既存の事業や商品のPRを含めたものになってしまう場合は、新規拡充部分に係る分を明確に示した上で、減額して計上していただくなど申請者に対し、事前相談の段階から事務局より対応を求め精査していただいております。

以上が要綱に基づく企業からの申請に対する環境基金助成の考え方になります。

続きまして各申請の概要を説明いたします。受付番号1、トップシーラーに適合するバイオ素材の有効活用（開発）方法を用いたプラスチック減量と食品ロス

の効果についてご説明いたします。

株式会社ダイモンからの申請です。こちらは区内の事業者に対し、トップシーラー機の無償貸し出しを実施し、プラスチック使用削減、食品廃棄物の削減を目指すというものです。

こちらの会社はもともと100%植物由来の容器を開発販売しており、今回新たにトップシール包装用の100%植物由来の容器の開発を行い、トップシーラー機とあわせて、普及を目指したいということです。

また貸し出しを行った店舗にご協力いただき、使用の様子をSNSで周知することで一般消費者に向けた啓発も考えています。

次に、受付番号2「足立区から世界へ広げる持続可能なもの作り」についてご説明いたします。

株式会社イデビュからの申請です。大量生産大量消費が課題となっているアパレル業界におきまして、自社サービスである完全受注販売できる「fabme」を普及させることにより課題解決を目指すということです。

今回の活動ではPRの最小若者に特化しプロモーションも実施し、また関係に配慮した基盤商品の開発を行っていきます。事務局からは以上でございます。

（倉阪秀史 会長）

はい。ありがとうございます。

それでは事務局は受付番号1の申請者の入室案内をお願いします。

（申請者入室）

（倉阪秀史 会長）

それでは、申請内容について7分程度でご説明をお願いいたします。2分前と

終了時に事務局からお知らせいたします。

その後約 10 分の質疑応答を予定しております。それでは始めてください。

(株式会社ダイモン 大門氏)

はい。よろしくお願いします。

私は足立区千住からやってまいりました。株式会社ダイモンの大門と申します。

本日はトップシーラー機に適合するバイオ素材の有効活用を用いた、プラスチック減量と食品ロスの効果について発表させていただきます。

弊社は足立区千住河原町で、今年で創業 70 年を迎えます。

その軸としまして、包装資材や食品以外の一切を取り扱った、キッチンペーパーなどの消耗品を地域活性につなげることを目標に商いをさせていただいております。

そして、エコ容器の開発です。開発におきましては約 11 年前からコンスターチ、サトウキビの 100%植物由来というものをベースに環境改善を目標に開発をさせていただいております。

エコ容器については、コンスターチという材質をきっかけに、以降色々なアイテムも作らせていただいております。

サトウキビのフードパックや、ムギとタケが 50%ずつの植物由来のフードパックなどを取り扱っております。

そして、100%植物由来ということを謳わせていただいておりますので、うちの実家の庭を使って、実証をしました。

見てのとおりに、開始 1 ヶ月、2 ヶ月、3, 4, 5 となっております。左から、コンスターチ、それからサトウキビのラミネートしたもの、そして順にムギタケをラミネートしたもの、そして次がサトウキビのラミネートしてないものです。最後

にムギタケのラミネートしてないものですが、4 ヶ月目から結果が著しく見えてきて、最終的に 5 ヶ月後におきましては、この 2 つ以外については全て堆肥化されたということが実証されております。

そして今回の活動は、ユーザーさんのコスト的なニーズも踏まえた上で、トップシーラーを用いることによって、よりエコ容器で環境改善を図りたいということが背景にございます。

そして今回 SDGs、当然これも決して外せない部分ですが、うちにおいては 12 番の持続可能な消費と生産、14 番の海洋と海洋資源を保全し、持続可能な形で利用することをベースに掲げております。

そして目的につきましては、プラスチック減量と CO2 削減の効果が一つ。そして食品ロスの防止、それを踏まえた上で環境問題改善の解決に貢献をしたいと考えております。

そして実際実物をお持ちしました、本事業に用いるトップシーラー機です。

当然トップシーラーという形だけで促進するという部分においては限度があるため、容器については、決まった型を用意しております。うちで一番よく出ているエコ容器の高さを調整した上で今回 2 種類提供していく予定です。

具体的にどのくらいプラスチックの削減が図れるかというところですが、左側につきましては、ムギタケ素材にラミネートした状態で、そこを PET フィルムをかけますが、そこに対して右は一般的なプラスチック容器です。キッチンカーでよく出ているベスト 3 アイテムです。

その定番品そこに対して比べたものはこちらになります。実際ムギタケについては本体が 0 g という計算になりますの

で、フィルムの部分だけは1.5g、それに対してプラスチックはトータルで16.9gということで、90%厳密に言うと92%以上のプラスチック使用の削減を図ることができます。

今朝程お送りした資料ですが、市販のカット野菜をプラスチック容器並びにムギタケの素材にフィルムをラミネートしたものという形で、10日間で8検体用意し、実際ご覧のとおり、3日目から明らかに増殖というものの変化が大きくなると思います。

その総括としまして、食品ロスの部分について、数字上ではご覧のとおりですが、やはり明らかに密封性も含めて酸化が防げるということもありまして、結論としてはトップシールを用いることで、消費期限の延長、そして食品ロスの効果も実現できるだろうということを実証したと思っています。

最後ですね、そもそもトップシーラーをどうするかというと、まず無償レンタルを考えております。その上でTikTokの発信を同時に行い、尚且つ各イベントにおいても展開をしていくことを考えております。

実現可能性におきましては、もともと足立区で根づいていることと、やはり元々11年目からエコ容器を使用させていただいているということを考えると十分にそういった実績においては、実現できるだろうと思っております。

TikTokの部分について具体的な話をしますと、TikTokを使用することによりオーガニック流入という部分におきましては、どういった他の広告媒体を使うよりも最適であろうということが1つ。

また金額につきましても、3社相見積

もりを取った上で、結果的に一社に絞らせていただきましたが、より少ないコストで今回の認知度を高めるということには、プラスになるということで、あえてTikTokを採用したいという思いです。

以上です。

(倉阪秀史 会長)

はい。ありがとうございました。

それでは、ご質問ご意見がある方、挙手をお願いします。オンラインの方は画面に挙手をお願いします。

袖野委員をお願いします。

(袖野玲子 委員)

はい。ご説明どうもありがとうございました。

すでにエコ容器については取り組まれているということで、今後さらなる発展をとということです、二点ほど質問させていただきます。

一点目ですが、フードロス削減のところで消費期限を延ばせるからというご説明でしたが、お惣菜とかですと、自分の感覚でいうとだいたい今日明日ぐらいに食べ切るっていうような感じで売られているのかなと思います。

販売店さんの方から消費期限を伸ばしたいといったニーズがあったりするものなのでしょうか。3日くらいお惣菜を置いてくつというシチュエーションはあまり思い浮かばなかったのが質問です。

もう一点が、TikTokについてですが、見積もりを拝見すると、なかなか高額なお値段だと思います。

若者でしたら、自分のスマホでぱっと撮って編集してっていう形で、ほとんど予算かからないと思いますが、今回プロにお願いすることで、フォロワー数1万というのかなり多いように思えますけ

れども、見込みというか、実績のある会社なのかという点について、教えてください。

よろしくお願いします。

(株式会社ダイモン 大門氏)

まず消費期限の延長につきましては、お客様からニーズがあったかという部分においては、業種ごとにお話は変わります。ただ一般的に先ほど対象に挙げましたキッチンカーであったり、一方の利用する側のお客様においては、基本はやはり先ほどお話のあった翌日までっていうことを前提にしているような文化というか、そういう意識があるのでお話も上がっております。

1 つ例を挙げると、例えばセブンイレブンのサラダカップは基本翌日でしたが、2.5 日分トップシールをすることによって延長させました。

おそらくタイミングによっては翌々日まで商品が置いてあるというような状況を踏まえると、先ほどのニーズの有無はとても大事なところですが、極端な話をすればあくまでオーナーさんサイドで消費期限を設定していただく形になりますので、文化的なものも翌日までじゃなくて、翌々日までっていうことを目指しております。

次に、TikTok つきまして、こちらについては現状 Facebook、それから Instagram については、4 年やってようやく 800 人弱ですかね。弊社においては、そういった技術を身に付けてはおりません。

やはり現状、特に動画、中でもショート動画というものにおいては、老若男女問わずして、皆さんおそらく見るであろうというところですね。

そういった背景も踏まえた上で、僕の中では、営業力、マンパワー的な部分も含めて、かなわない部分もあるということで、足立区に限らず全国的な認知度を高めるために、媒体を利用したい。

そういった中でやはりプロのお力を借りる。そのプロの中で、広告媒体大手の扱いがある三社ピックアップさせていただき、同じ条件を掲げたもので一番安いところをピックアップさせていただいたということが一つ。それとその一社は同じ足立区の会社であったことも事実で、そういった意味でもよりこの目標においては力を入れ、想定いたしました。

(袖野玲子 委員)

はい。ありがとうございました。

(倉阪秀史 会長)

私も TikTok について、この見積もりは高いと思っています。というのは、この分野って、そういう会社をお願いするというよりは、例えばクラウドワークスとかランサーズとか、そういったところでアウトソーシングが簡単にできる分野です。

今調べてみたら運用代行で月 12 投稿で 2 万 5000 円とか、16 投稿で 4 万円とかです。そのぐらいの値段でインフルエンサーと称している人たちが引き受けているようですよ。そういった形でやるものと、約 30 万で会社をお願いするものとはクオリティが格段に違うとは思えません。

その点はいかがでしょうか。

(株式会社ダイモン 大門氏)

はい。やはり信用という前提で考えていたもので、先ほどの足立区の話はさておき、正直、差と言える部分については、実績という意味では大きな違いがあると

はいえ、技術的な部分においてのスキルというのは説明ができないので、今一度検討させていただきます。

（倉阪秀史 会長）

はい。私今見てもランサーズの SNS 広告運用代行でどのぐらいが相場か見ていますが、そこは十分選択肢を増やして、安くこの事業を^を広報する工夫をしていたきたい。

（株式会社ダイモン 大門氏）

かしこまりました。

（倉阪秀史 会長）

他何かございますか。はい。石毛委員をお願いします。

（石毛かずあき 委員）

先ほどお話を伺って、このようなエコ容器またはトップシールを使った包装に関して、環境に配慮していくこと、フードロスの数も削減できることはよくわかってまいりました。

その上で御社もともとエコ容器という形で 11 年間やっていて、環境に配慮したということで、それはもう会社の実績にも繋がっていると思います。

そんな中で、この事業を通してどのような形で環境への貢献を御社として対応を望むのかなということをお伺いしたいです。

何故かという、やはり先ほど会長からもありましたけれども、TikTok という広告媒体を使って、私が 1 営業マンだったら、当然これは会社の利益として業務として、売り上げ等々、そういったことも含めて、当然、会社企業ですから、その上で、TikTok に高額のお金を使って設定をし、その効果である程度の営業成績が上がっていくのであれば、それはプラスだと思います。

環境基金を使って実施するので、ある程度環境効果への貢献として御社がどのような取り組みを今後行っていくのかお伺いしたいです。その点いかがですか。

（株式会社ダイモン 大門氏）

はい。現状エコ容器を販売しており、あえて営業的な言い方をさせていただきますが、これの意図はお客様の選択肢ということがきっかけで始まっております。

その上で、もともとイベントやキッチンカー、そうしたお客さんが多く存在しているという背景もあり、植物由来の容器というものに携わりたいて方が多かったことが最初のきっかけです。

ただ現状その上で、先ほどお話をしたようにスピード感が決してあるわけじゃないので、エコ容器を多く求めて来るユーザー様も増えていますが、ただ実際問題、コスト的には正直容器って高いです。

この料金が高い、でも実際使いたいいところでは使えないとお客さんも増えている中で、トップシーラーを一つきっかけに、これちょっと金額の話を伝えておりませんでした。そういった意味ではエコとはまた別の観点でお客さんにとっては非常にありがたい。

簡単に言うと、プラ容器と比べて 5 円の差があります。当然エコ容器とフィルムの方が安い。償却するに当たっては約 30 ヶ月かかります。でも 2 年半という期間で、その金額が十分に償却できるということを考えると、今までのやり方というよりは、トップシーラーを用いることでエコ容器を使うことができますよというストーリーになり得るということを僕の頭に置いています。

そういったことで結果的にどうなるか。

当然エコ容器のお客さん、エコ容器を使っていた方が増えるってことも一つそうですし、僕の中では、サトウキビの搾りかす、ムギタケというのは、タケはともかくですね、無駄になったものを採用しているということでは、それこそいわゆる CO2 削減という部分についても増やしていません。植物に入ったものを出しているだけなので、尚且つ PM2.5、単純にああいった物を燃やしてしまうと、別のことで環境を破壊してしまうということ考えた場合は、こういったユーザーさんを増やすことによって、結果少しずつ微力ではありますが、環境改善が図れるということをお負しております。

そのためこういうふうにしたいということをお目的にしますっていう具体的な数字はないですが、少しずつ売り上げという部分もそうですが、ユーザーを増やしていくことが僕の使命と考えております。

(佐藤あい 委員)

ありがとうございます。今のお話の中で、私が理解しきれなかったところがあり、質問をさせていただきます。

トップシーラーにエコ容器を採用することでプラ容器のときよりもコストとしては削減ができるということでしょうか。

(株式会社ダイモン 大門氏)

はい。

本体価格については若干変わります。

先ほどは売価ではなく仕入れ値で話をしました。

ただフィルムについては当然ながら、大幅に違います。フィルムが1個あたり大体 15cm 程度使う幅においては、透明蓋と比べたときに、プラスチックは本体と蓋を合わせると 17.5 円、エコ容器の大き

いサイズのほぼ形状が同じものとフィルムの金額 3 円強を合わせて 13.02 円ですね。この差が、4.48 円です。これ売価だともっと広がると思います。

トップシーラー機 14 万 9000 円という仕入れ値を考えた場合は、約 3 万 1255 円程度で償却出来るというところです。

ただし、蓋がちゃんと閉まるものを使ったときに、エコ容器を選択すると価格が高いことは事実です。

(佐藤あい 委員)

ありがとうございます。

やはり使っていただける方が増えていくかどうかというのは、実際操作性の面で、使うのが大変だとなかなか広がっていかないと思いますが、簡単に使える仕様になっているのでしょうか。

(株式会社ダイモン 大門氏)

もちろんです。

機械においては、実は国産品はなかなかなくて、海外製品においてある程度あるという状況です。今ちょっと見にくいと思いますが、非常に簡易的でデパ地下さんの需要も一部聞いている状況です。

できる限りコンパクトにしており、スイッチ ON と OFF することだけで利用できる形にしています。金額だけでなく、使い勝手も含めてプラスになるように考えております。

(佐藤あい 委員)

ありがとうございます。

最後に一点だけ、これまで Instagram の運用はされているとおっしゃっていましたが、そこは特にプロの業者さんに依頼をしていないということでしょうか？

(株式会社ダイモン 大門氏)

そうですね。

そこに置いてはあくまで、うちのお客さんだとかに向けて、社の活動内容というものを中心に反映させていただいているという形ですね。

（佐藤あい 委員）

かしこまりました。

現在 TikTok は導入されていないということですね。

（株式会社ダイモン 大門氏）

はい。

（佐藤あい 委員）

なかなか TikTok であるべき理由ってというのがちょっとわからなかったの、TikTok だからこそという部分があれば教えていただきたいと思います。

（株式会社ダイモン 大門氏）

だいたい予定としては 60 秒から 90 秒の動画ということを第一に考えていました。

画像という部分においては限度があるためです。ただ、私動画においてはまったく知識等がなかったものですから、信用信頼のある会社さんに委ねたいという部分が事実ですね。

ただ、その点については会長にもご指摘いただいたように、もう 1 度改めて検討はさせていただきます。

（倉阪秀史 会長）

動画を作っておけば、TikTok に上げても Instagram に上げても、YouTube のショートにあげても構わないわけですよ。コストがかからないわけですから、TikTok に限る必要も全くなくて、ショート動画を作って SNS で普及するためのコストということですよ。

（株式会社ダイモン 大門氏）

おっしゃるとおりです。

例えば撮影代行というところがあって、

出張とかそういった経費も一切含めた形ですね。

（倉阪秀史 会長）

実際、素材を撮って動画を作ってそれで編集だけしてもらえばいいと私は思いますが。

（株式会社ダイモン 大門氏）

本当に全ての代行をお任せしていて、その内容をお任せし、会社としては認知の部分に力を入れると、あえて業務を分けてしまったことは事実ですね。うちでもできることはできるはずですよ。

（倉阪秀史 会長）

はい。ありがとうございます。他にありませんか。

（岡田将和 委員）

説明ありがとうございます。足立区で 50 年 70 年、こういう環境に配慮した容器も開発されてやっつけていただいていることがありがたいなというふうに感じました。

2 点、プラのロスと、食品のロスという点において、その数値的なものが説明資料になかったです。例えば飲食店ですとかキッチンカーですとか、そういう人との繋がりがあるっていうのはなんとなく説明していただいたところですが、例えば私もキッチンカーで買わせていただいたときに、容器がプラなのか、それともそういう 100%植物由来のものなのかを意識しないで買わせていただいた部分もありますし、この環境基金が区民のためっていうことを考えたときに、キッチンカーですとか飲食店さんっていうのが、足立区を拠点に活動している飲食店さんなのか足立区民の方に提供している容器なのか。

その辺りが私の中で解像度があまり高

くなかったなので、そこについて教えてください。

(株式会社ダイモン 大門氏)

かしこまりました。

キッチンカーがわかりやすいので、ここでお話をすると、今うちのお客さんが大体 450 件おります。

その中で足立区だけに絞ると、5 分の 1 もいないです。本当に数十件程度です。

ただ今回一つのきっかけとして当然足立区のために環境改善を図るということが目的ではあります。

うちのお客さんのプラ容器使用の比率については把握しているので、プラとエコ容器の割合のうち、何割をエコ容器に移し変えようということを意識させていただきます。

現状キッチンカーに限らず、足立区のお客さんはスーパーとか小売りなどおりますが、正直言うと、キッチンカー以外はエコ容器を使っていない状態です。

もうゼロに近い状況の中なので、この機会をきっかけに 0% を 1% にする 2% にするという発想でしたので、数値で説明ができず本当に申し訳ありません。

現状はキッチンカー以外の業種、飲食業者においてはほぼゼロであるということで、ご理解いただけたらと思います。

(岡田将和 委員)

はい。

次に、12 台＋予備について、この 14 台というのはどういう根拠でしょうか。

例えばこれが 5 台でも 10 台でも 20 台でも申請は出せると思います。14 台の根拠を我々が認めるわけですが、その数値の根拠って何でしょう。

(株式会社ダイモン 大門氏)

まず、12 台においては、だいたい 1 ヶ

月の目安として月 3 台を稼働するというところですね。フルになった状態のときは当然 12 台がフル稼働した状態に対して、プラス 2 台は万が一何か故障等があったり、場合によっては月 3 回という想定よりも超える場合もあるため、プラスしました。

あくまで 2 台はストック用です。ただ月 3 台の部分の内訳については、今事前にお話をさせているお客様もいらっしゃるし業種でこだわってはおりません。あくまで、足立区をベースにした飲食店キッチンの方に使っていただくことを考えております。

そもそも何故月 3 台なのかですが、うちの方でのご案内等を考えたときに 3 台が限界であろうというところで決めさせていただきました。だいたい一週間に 1 回程度、営業でのご案内できますが、やはりただ適当に置いてくるってわけにいけないので、十分な説明等を考えた場合は月 3 台が限度ということで設定させていただいております。

(倉阪秀史 会長)

今のご説明だと 5 台でいいのではないのでしょうか。

一つの機械について、3 ヶ月間の貸し出しですよ。ケア含めて 3 台が限度でスペアが 2 台。そうすると 5 台あれば、一旦貸し出したところから 3 ヶ月使って帰ってくるので、交代で運用が可能ではないですか。

14 台買う必要は全くなくて、5 台買えば、今のご説明だと 3 台以上ケアすることが難しいということであれば、5 台で運用されると、メンテナンスの期間はどのくらいですか？

(株式会社ダイモン 大門氏)

一ヶ月ですね。

(倉阪秀史 会長)

買うのは5台で十分ではないかと思いますが、いかがですか？

(株式会社ダイモン 大門氏)

一度検討します。

(石毛かずあき 委員)

先ほどのTikTokもそうですが、御社の検討事項の中で計画的にこれがこうだというのがあれば、我々はもうそれで判断していきます。

こうだからこうだというのを心意気もちょっと知りたいので、環境のことについてもちっと絞っていただいて教えていただくと我々も審査しやすいかなと思います。

(株式会社ダイモン 大門氏)

申し訳ございません。初めてのということもあって、私も自信を持ってお願いをしているものの、融通をきかせようとしてしまったことは事実です。

練に練って具体的な14台の根拠について挙げるができなかったことは事実ですが、それを基に運用計画を建てることは間違いありません。

(事務局)

事務局として事前に聞いていたところですが、1か月3台、そしてそれが3ヶ月続きます。次の2ヶ月目には別の3台が必要だそうです。さらに次の3ヶ月目に渡す3台が必要という形で4ヶ月目も回すという形で聞いています。プラス2台は余剰だと聞いています。

(倉阪秀史 会長)

先ほどの説明だと、ケアは3台が限度だとおっしゃっていましたがいかがでしょうか。

(事務局)

そちらについては、1か月の限度として事務局としては事前に聞いております。

(佐藤あい 委員)

貸し出し前の説明のマンパワーということで、貸し出し自体が3台しか無理というわけではないということですね。

(株式会社ダイモン 大門氏)

そのとおりです。

(事務局)

プラスチック削減の効果は90%削減っていうことを一応数値としては事務局としては聞いていました。

(石毛かずあき 委員)

我々もそれは事前説明のときに聞いていましたが、違うことになっていけば、直接確認したいです。

(事務局)

すみません。事務局として補足させていただきました。

(株式会社ダイモン 大門氏)

私の説明不足でした。事前の説明や準備において月3台であろうというところですね。

(倉阪秀史 会長)

はい。ありがとうございます。

かなり時間が経過していますね。他に何かご質問はありますでしょうか。

なければダイモンさん質疑は以上したいと思います。ありがとうございます。

(申請者 退出)

(倉阪秀史 会長)

それでは、受付番号1について評価の入力と協議を行います。

(評価入力)

【評価については非公開】

(倉阪秀史 会長)

続きまして、受付番号2のプレゼンテーションに進みます。事務局から申請者の入室のご案内をお願いいたします。

(申請者入室)

(倉阪秀史 会長)

それでは、申請内容について8分間程度でご説明をお願いします。2分前と終了のタイミングで事務局からアナウンスいたします。その後約10分で質疑応答をさせていただきます。

よろしくお願いいたします。

(株式会社イデビュ 関根氏)

それでは始めさせていただきます。

株式会社イデビュの関根と申します。

本日は足立区から世界へ広げる持続可能なもの作り事業計画について説明させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは弊社紹介より、弊社は2001年に創業して小売業を約20年間行っております。主な販売先は百貨店やショッピングモールなどです。

今回の目的はファッション産業の現状を知ってもらい、1人でも多くの人に、環境に配慮したもの作りの仕組みに参加してもらおうことです。

皆さんはアパレル産業が環境負荷の高い産業ということを聞いたことがありますでしょうか。

実は世界で2番目に環境負荷が大きい産業と言われています。

それはなぜか。製品をつくるには大量の水が必要です。ジーンズ一本作るのに約7500Lの水が必要であり、これは平均的な人が飲む水の量を約7年分に相当します。

そして、生産工程や輸送のエネルギーコストにより、CO2を多く排出します。

また、低賃金国での児童労働や、劣悪な環境下での生産も問題となっております。

そのようにして作った商品は、現状の日本では大幅な値引きをしても半分以上が売れ残っているというのが現状です。

残った商品は廃棄処分など行いますが、最終的には砂漠などへの破棄に繋がっています。

このようなことから大量生産、大量消費、大量破棄を毎年繰り返しているのが、アパレル産業が、環境負荷の大きい産業と言われている所以です。

実際に私達も百貨店で商品を販売する際にその年の何度も何度もリピートするような売れ筋商品であっても、最終的には色やサイズが残ってしまって、在庫が残ってしまうということに悩まされております。

これを解決するために私達はfabmeという仕組みを作りました。

fabmeは必要なときに必要なものを必要な人へ、一枚から製造できるプラットフォームです。

従来のように、需要を予想して大量に商品を作るのではなく、また、余った商品を、リサイクルやリユースというふうにするのでもなく、そもそも余分な商品を作らないという仕組みになっています。

作ると欲しいが直接繋がるクリエイティブプラットフォームとして、持続可能なもの作りを実現します。

今回の拡充ポイントです。1番目SDGsに関連する基盤商品の製造、2番目プロモーションイベントの開催、3番目ワークショップの開催、4番目特産物や区内企業とのコラボレーションです。また、これらの広報活動およびサイトへの

反映をします。

次に、具体的な内容です。

SDGs に関連する基盤商品の製造です。製造する際の基盤となる商品には、環境に配慮した素材を使用します。

近年特に若者の間では、環境問題への意識が高まっています。Z 世代の約 70% が環境や、社会問題に配慮した企業の商品を選びたいと回答しています。

そのようなことから、環境に優しい素材を使用したブランドや、サステナブルな商品を好む若者が増えており、SNS を通じた情報発信がその傾向を後押ししています。

そのような背景を踏まえて、日ごろから、ファストファッションに慣れた、デジタルツールの操作にも抵抗のない若者を中心に今回の取り組みを知ってもらい、実際に利用してもらうことを目指します。

そのための方法として、プロモーションイベントを開催します。

今まで通常のアパレルショップでは製造したものを陳列して販売しますが、今回は店頭では製造したものを売らずに、サンプルのみを展示し、その場でオーダーすることで在庫を発生させません。

会場では今回の取り組みを看板等で説明いたします。

次に、ワークショップの開催です。プロモーションイベントでは、欲しいという購入者拡大をすることに対してワークショップでは、作る側のデザイナーの拡大を目指します。

商品化までの流れを体験してもらい、自分でデザインする楽しさを体験してもらいます。

次に足立区の特産物や区内企業とのコラボレーションです。

区内には職人技術の詰まった伝統工芸品等が多数あります。そのようなものを基盤商品として使用することで、匠の技を知ってもらい日本人はもとより、インバウンドの外国人にも日本の伝統工芸品を身近に感じてもらい、実際に利用してもらいたいと考えています。

このことから、足立区から世界へ広げる持続可能なもの作りを目指したいと思います。

同様に区内にもたくさんの魅力のある商品を製造してくれる業者さんがあります。

今回のお話は足立区での環境基金での話ですが私自身生まれも育ちも創業から現在に至るまでずっと足立区民なので、少しでも地域の活性化に携われたら良いなと思っています。

次に広報活動です。今までの取り組みに対して認知を広めるために広報活動が必要です。

そのため、ターゲット層や業界関係者に効果的にアプローチするために専門媒体の広告掲載や特集記事の依頼を予定しています。同様に迅速かつ広範囲な情報発信が可能なプレスリリースを活用して、メディアの露出の機会を増やし、共感と信頼を得ることを目指します。

最後はデザインやサイトへの反映です。今回の取り組みに対して、ブランディングページを準備し、詳細な説明ページを作ります。

またサイトの方も、今回の取り組みをわかりやすくデザインに落とし込みます。

以上が足立区から世界に広げる持続可能なもの作り計画です。御清聴ありがとうございました。

(倉阪秀史 会長)

はい。ありがとうございます。

それではご質問ご意見がある方は挙手をお願いします。袖野委員をお願いします。

（袖野玲子 委員）

ご説明ありがとうございます。

地域活性化っていう思いが伝わってきて大変良かったです。

幾つか質問をさせていただきますが、色んな要素がご提案の中に書いてありましたが、1 つは缶バッジについて、このアプリ自体は、アパレルの洋服を注文できるアプリなのかなと思いましたが、缶バッジで作る楽しさというのはあるのかもしれないですが、デザイナーを育てていくというところに繋がるかなっていうのはちょっと遠いかなと思ったので、なぜ缶バッジなのかなっていうところを一つ教えていただければと思います。

それともう一点、事業の実現性の部分ですが、実施期間は 6 月 30 日までということで非常に短くて、これだけのことができるのかというところで、すでに色々準備はされていると思いますが、ポップアップや、雑誌への掲載など、基金の助成と関係なくすでにもう話が進んでいるものなのかという点についてお願いします。

（株式会社イデビュ 関根氏）

はい。まず一点目の、なぜ缶バッジなのかですが、この fabme という仕組みは写真やイラストをサイト上にアップロードすると、様々な商品になります。

そのため、缶バッジがファッションのものと遠いというよりは、缶バッジであったり、ファッション雑貨というものもたくさんある中の、1 つのその場で持って帰る入り口として、通常であればネットでやってくださいというところを、目

の前で書いた絵とかがその場で缶バッジにして持って帰れるという、付加価値をつけて持っていってもらおうというところで缶バッジを選んでいきます。

缶バッジを作ることが目的ではなくて、その缶バッジに使用したデザインが生地になり、様々なファッションアイテムになるというのがこの fabme というものの仕組みとなっています。

（袖野玲子 委員）

缶バッジにデザインしてそれが他のものになるのですか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

缶バッジをデザインする際に、例えば紙に書いた物をスキャンしてデータにすることで、他のいろんなスカートだったりワンピースだったり書いた模様や、書いたものが様々な製品にその場でなるということで、デザイナーとして参加するための入り口として、缶バッジっていうものがもらえるならやってみたいなというところのイベントの内容です。

（袖野玲子 委員）

はい。わかりました。デザインっていうところですね。

（株式会社イデビュ 関根氏）

はい。二点目が実施期間に関してなんですが、この中で、商品の開発とポップアップとワークショップ、足立区の特産物というところが主にやらなければいけないところですが、その期間に対して 6 月までに間に合うかという部分に関しては、十分間に合うと感じております。

それは日々ものを作ったりすることを交渉する中で、期間的にも十分であると考えていますし、4 月に例えばこういう商品を作りました。それを少し変えた方がいいっていうところで 5 月に対応し、

それをさらにまた6月にブラッシュアップするということは十分にできると考えております。

もちろん期間以降も、弊社で環境問題っていうところを考えて作った仕組みなので、継続してやっていくつもりです。

このプレスリリースや、専門媒体に関しても、申し込みから実際打ち合わせをして1ヶ月もかからない程度に進められると思うので、実際に4月から6月の期間というところは問題ないと考えております。

（袖野玲子 委員）

なるほど。わかりました。

あともう一点、今回のご提案の中では割と大きな金額を占めているところに、アプリの改修の部分がありますが、これは今回提案いただいている内容に関して、システムの大きな変更みたいなものがあるのでしょうか。

それともデザインがちょっと変わるとか、別のページに飛んで新しいページの部分を作るだけなのかを聞かせてください。

（株式会社イデビュ 関根氏）

資料の10ページですが、現在のページが一番左に載っておりまして、そこにランディングページと言われるSDGsとはというところで、例を出しておりますが、今回の4つの施策に対して、商品を作る、ポップアップをする、ワークショップをする、区内の特産物をするというところで、4つの全く別のページを作る予定です。またそのデザインする際に、現在はないですが、レディースやキッズやペットやそういうカテゴリーがある中に、サステイナブルという項目を作って、今回の環境のページを別に作る予定です。

（袖野玲子 委員）

なるほど。既存のシステムも何か大きく変更するというよりも、新しいページをくっつけるっていう感じですか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

そうですね。

システム自体は出来上がっているのですが、どちらかというと、これを専門的に扱うページをデザインとコーディングしてもらい、実際の既存のものに繋げていくというイメージです。

一部そのために必要な開発っていうのもあるかもしれませんが、そこはこれからの話となっております。

（袖野玲子 委員）

わかりました。ありがとうございます。

（倉阪秀史 会長）

他にご質問はありますか？石毛委員。

（石毛かずあき 委員）

はい。今回ターゲットにしているのは企業、それとも個人ですか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

はい。この仕組みに関しましては、実際、企業さんや、個人ということは問わずに利用ができます。

（石毛かずあき 委員）

ということは、ここにでてくるデザイナーさんというのはどの程度のレベルのことをおっしゃっていますか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

例えばワークショップに関して、そこでは自分の写真や、タブレット等で何かを書いたり、いわゆる世の中のファッションを作るためのデザイナーというよりは、自分の持っている写真だったりそういったものに加工して、何かするっていうものだったり、実際に本格的にその生地となるパターンを書いて、それも製品

化できます。

3 歳の子が書いた、お父さんの似顔絵なんかも商品化することができます。

(石毛かずあき 委員)

はい。ありがとうございます。

(倉阪秀史 会長)

私の方から中身がちょっとわからないので、伺います。

環境に配慮した基盤製品の開発について予算上明細を見ると、3 つの工場で商品の開発を、それぞれの 1 万円×5 商品開発、それから製造については 3000×100 と書いてあります。

まず環境に配慮した基盤製品とは何でしょうか。それが具体的でないと、ここ多分お金出せないと思います。

選ばれた商品が本当に SDGs に貢献するのか、環境配慮されているのかというのが今確認できませんから、その段階で多分お金は出すというのは危ないと思います。

それ前提としてどういう商品を何種類ぐらい何個ぐらい開発するのか教えていただけますか。

(株式会社イデビュ 関根氏)

はい。SDGs に関連する基盤商品の製造というところですが、基盤という言葉を使っていますが、この fabme という仕組みの中には、もともと作れるものがいくつかあります。

その商品というものは現時点では環境に配慮された、例えばリサイクルをしたものを使っている商品はないですが、ここに挙げた工場というのは、今取引のある工場に、今は通常の T シャツとして作ってもらったものを、例えばそれを環境に配慮したリサイクルの綿を使ったものを使って、この 100 枚を作ってくだ

さいみたいなことで、今はないものをこれから発注していくということです。

(倉阪秀史 会長)

具体的な商品、今 T シャツというのがでしたが、商品のラインナップを教えてください。

(株式会社イデビュ 関根氏)

開発の中で 5 種類ほど上げていますが、まず今回の環境に適したものというところで、再生利用されたような生地というものを考えています。

その中でまず一つは T シャツだったり、パーカーだったり、あとポーチですね。それとトートバッグ、スカート類などのボトム類などを考えていて、その 5 種類を開発します。

これからサンプルアップしていただいてそれが OK になったら製造するということで 100 個 3000 円のベースとなる商品を 100 個作って、その商品が皆さんからデザインをアップアップロードしていただくと、それが商品に反映されて届くという仕組みとなっております。

(倉阪秀史 会長)

そうすると 3000 円っていうのは単価ですね。

100 個っていうのは、同じ製品を 100 作るのであって、デザインは 1 個ずつのデザインは受注されたものを載せるということですね。

(株式会社イデビュ 関根氏)

そうです。

(倉阪秀史 会長)

そうすると、今 T シャツ、パーカー、ポーチ、トートバック、スカート類と伺いましたが、それについて、リサイクルされた綿とか、そういった物を使って 100 個ずつ計 500 個づくり、500 人の人

がそれぞれ自分の写真とかを載せることができるようになりますということですね。

(株式会社イデビュ 関根氏)

はい。

(倉阪秀史 会長)

そこまで具体的に書いてくれないと申し訳ないですが、わかりません。

環境に配慮した素材を使ったアイテムの開発だけしか書いてないので。今伺ったのでとりあえずやりたいことはわかりました。

他の方がいいがですか。

(佐藤あい 委員)

fabme さんのインスタ投稿を拝見していると、既にデザインを登録して商品にするっていうことはできるということだと思いますが、今回新たな取り組みとなるのは完全受注生産型のショップとワークショップということですか？

(株式会社イデビュ 関根氏)

はい。新たな取り組みとしましては、今回の拡充ポイントというところで示しています。

まずは、SDGs に関連する先ほどのような素材やものを使って開発をします。

そのベースとなる商品を販売できるイベントの開催、またそれを作るためのワークショップを、3 番目として考えております。同時に、足立区内の伝統工芸品とコラボをして、海外のインバウンドの対応として広めていきたいというところで4つの施策を考えております。これが新しいポイントとなっております。

(佐藤あい 委員)

ありがとうございます。

環境に配慮というところだけでなく、区の伝統工芸品とのコラボレーションと

いうのもすごく楽しい企画だと思います。

ポップアップでサンプル商品があつてという場面のイメージが湧ききらないんですけれども、会場イメージの写真がありますが、ターゲットとしては若い世代、10代、20代に向けたファッションになってくるんでしょうかね。

(株式会社イデビュ 関根氏)

はい。基本的にはまず若者を中心に、Z世代、SNS等にも慣れているということと、こういうデジタルツールが問題ないというところで、普通であれば、店頭で5000円という商品を買って持って帰るところ、その場でQRコードから注文していくという仕組みも問題がないのではということから、若者をまずターゲット層として試してみたいと思っております。

(佐藤あい 委員)

例えばこのサンプルに対し、これいいなって思ったとき、注文するときに、色は自分で選んだり、デザインや柄が違うものとかにすることができるイメージですか？

(株式会社イデビュ 関根氏)

そうですね。主に形がそのもので、その柄が違うようなものが、デジタル上で並んでいるようなイメージです。

(佐藤あい 委員)

ありがとうございます。

(倉阪秀史 会長)

他いかがですか。岡田委員お願いします。

(岡田将和 委員)

ご説明ありがとうございます。

先ほどの質問の中にもありましたが、この3ヶ月間で、プロジェクトを遂行するというのですが、役員さん含めて2

名と記載がありますが、イデビュさんで動くのは関根さん以外にどなたかいらっしゃいますか？またどんな方と一緒にやられていますか？

（株式会社イデビュ 関根氏）

企画自体は外部の業者さんがいるので、その製品に関しましては弊社にいる2名のうちの1人のデザイナーでデザイン等はありません。

もちろん私もそこに携われますし、ポップアップだったり、そういう場所の交渉というところも、ネットのそういう1日限りみたいなポップアップショップだったりマルイさんの方もこのような相談窓口みたいな設けているので今の人数で、2人で行えるというわけです。

（岡田将和 委員）

なるほど。もう1点すいません。

足立区の伝統工芸品とのコラボレーションっていうのがすごく楽しみだなと思ったのですが、4月に一つ、5月に一つ、6月に一つという、どんなイメージのものなのでしょうか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

はい。区役所の1階にあるような、足立区の匠というところで、例えば刺繍だったり、木工製品だったり、銀の細工だったりというところで、今回の特別なものとして、例えば木のスマホケースを作ってもらったりして、そのベースとなる商品に皆様がデザインを載せて作れるようなことを考えています。

（岡田将和 委員）

その木のスマホケースっていうのは、この中のどれに該当しますか？

（株式会社イデビュ 関根氏）

ここで言いますと特産物の部類なので、上から4つ目のところになります。

（岡田将和 委員）

なるほど。

木工のスマホケースを10個販売するという目標ということですね。

（株式会社イデビュ 関根氏）

そうですね。伝統工芸品に関しましては、そのように考えています。

（岡田将和 委員）

ありがとうございます。

もう一点、金額が一番大きくなってきているのが、先ほどのランディングページのデザインおよび作成ですが、先ほどの説明だとSDGsの説明のページを増やすように見えましたが、新規性というか、ランディングページに155万円かけるその効果というか、どんなふうにお考えなのかちょっと教えてください。

（株式会社イデビュ 関根氏）

まず、大きくは4つの施策をするというところで、1番目がSDGsの商品を開発するということと、2番目がポップアップするというところと、3番目ワークショップをするということと、4番目特産物をするというところに対して、それぞれ専用のページを考えています。先ほどの説明ではSDGsと書きましたが、あちらはサンプルの一つで、あのような細かい詳細ページをそれぞれ4つ作るというイメージで考えております。

その4つに対して、一般的にはランディングページの相場として20万円からだいたい30万円というところでかけたことから、この費用となる根拠を出しております。

（石毛かずあき 委員）

何度も申し訳ないのですが、これまでやってきたことと、新しく始めることを整理したいんですが、商品の在庫をおか

ないで、トートバッグとかTシャツとか、そんなようなものを web 上に陳列させて、これに対して誰もがデザインを起こして発注かけ、それを製造するという既存の事業を発展させ、新たに取り組もうとしているのが、伝統工芸ということになってくるわけですね。

（株式会社イデビュ 関根氏）

はい。今回の拡充ポイントとして、SDGs に対応した商品を開発して、その商品を売るためのイベントを開催して、それを作るためのイベントも開催して、足立区の工芸品もその中に取り組んでいくという 4 つのことが新しいことです。

（石毛かずあき 委員）

新たな取り組みの環境との繋がりが、どうだろうと思います。

当然既存の事業にはあると思います。

在庫は置かないですし、ジーンズ作るのにとんでもない水量を使うっていうのはよくわかりましたが、何か新たな取り組みの中で環境に対してこれだけの貢献が出来るっていうような、目で見てわかりやすいようなものはあるといいかなと思ったのですが。

（倉阪秀史 会長）

では、私から確認させてください。1 つ目ワークショップはどこでやりますか。2 つ目、伝統工芸品にもデザインを載せることになるのか、また伝統工芸品について、申請書には環境価値を加えると書いてありますが、これはどういう意図があるのか伺いたいです。次に 3 つ目が、何故 3 ヶ月でやんなきゃいけないのですか。1 年かけてやってもいいのではないですか。3 つ教えてください。

（株式会社イデビュ 関根氏）

はい。1 点目、開催場所は足立区内で

考えています。

商業施設として挙げられているのは北千住のマルイさんと西新井のアリオさんが考えられます。

ギャラクシティのような、子供たちが利用する施設も利用できるのではなかろうかと考えております。

ただ実際に話はしていないので今回の計画としてそのように考えているというところです。

（倉阪秀史 会長）

渋谷の例が出ているのは見積もりを作るために仮に出したということですか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

そうですね。足立区のマルイさんのイベントに関しては HP 等に掲載していなかったもので、同じようなスペースで渋谷の施設を例に挙げました。

（倉阪秀史 会長）

わかりました。では次に 2 つ目は伝統工芸品に素人の書いたデザインを載せるのかという話と、伝統工芸品に環境価値をどういうふうに付加するのかということについてはどうですか？

（株式会社イデビュ 関根氏）

例えば伝統工芸品の中で刺繍というものがありますが、その刺繍に使うベースの商品を環境に適したもので表現をして欲しいですというようなお願いをする予定です。

（倉阪秀史 会長）

使うベースというと？

（株式会社イデビュ 関根氏）

足立区の江戸刺繍のところだと、通常の布に刺繍を施していますが、その布の部分に関して再生の繊維を使用したものをを用いることで、環境に配慮したものを利用してもらうというイメージです。

（倉阪秀史 会長）

刺繍以外に、そういった可能性のある伝統工芸はありますか？

（株式会社イデビュ 関根氏）

やはり一番は刺繍というところが思い浮かんでいますが、その中でリサイクルでできるようなものっていうところでは木工製品だったりもできるのではなかろうかとは思っていますが、主に布っていうところでは刺繍が一番表現の部分でもしやすいなと考えております。

（倉阪秀史 会長）

伝統工芸は一般の人のデザインや写真を乗せるような余地はないように思います。

（株式会社イデビュ 関根氏）

一般の方がベースで作った足立のロゴマークみたいなものをその刺繍の中で表現してもらって、そのほかの部分に対してデザインをデジタル上でできるようなイメージです。

（倉阪秀史 会長）

伝統工芸品というのは、多分一般の人のものを載せると、価値が下がってしまうのではないですか？

（株式会社イデビュ 関根氏）

そうですね。ここで書いたのはその伝統工芸品を売りたいというよりは、その方々に fabme で画像を載せるためのベースとなる商品を作ってもらいたいイメージですね。

（倉阪秀史 会長）

ですから、fabme の素人さんが書いたデザインを伝統工芸品に載せてしまうと、工芸品としての価値が下がっちゃいます。

（株式会社イデビュ 関根氏）

そこはそうですね。職人なので話し合いの部分になります。

実際足立区の職人さんではないですが、他の職人さんとは接していて、その方のお話の中では、やはり賛否分かれる中でそういうことを面白いと思ってくれる方もいれば、自分の作ったいいわゆる匠の仕事というところに誇りを持っているのでやって欲しくないという意見もありますけど、そういうことに挑戦したいというところのお話も得ていますので、それが足立区内に持っていけないかなっていうところは考えています。

（倉阪秀史 会長）

わかりました。次に3か月でやる必要性について教えてください。

（株式会社イデビュ 関根氏）

それは実際1年というところの中で、3回この仕組みをやったら、今後の展望がわかるのではなかろうかというところで、今回のお話が4月からスタートということの入り口が決まっていたので、月1回と考えたときに1回目を4月に行い、それを修正して、2回目を5月に行い、その中で、1回2回でやったものを3回やると、概ねこの内容について今後どういうふうにできるかっていうところがわかるのではなかろうかというところで設定しました。

（倉阪秀史 会長）

ただ、伝統工芸品として何を選ぶかとか、ワークショップの開催場所とか、これから調整されるわけですね。だから4月にすぐにできるとは限らないので、そこはしっかり準備期間をとって、1年でその成果をみてもらえればこの基金としては問題ないですが、3ヶ月でやらないといけないという、御社側の理由はないですか？

（株式会社イデビュ 関根氏）

その3回やればということなので、例えば1月8月10月とかでもよかったですが、先ほどのお話のとおりそれに携わる人間というのが多くいるわけではないので、その3ヶ月の期間に凝縮して、そのことに集中するという意味で6月までにというところで挙げさせていただきました。また場所等に関しましては、実際オンラインで全て済みます。

（倉阪秀史 会長）

でもワークショップはリアルに実施しますよね。

（株式会社イデビュ 関根氏）

はい。それもマルイさんとかで考えてはいますが、1日空きのところで予約するとその場で取れます。

（倉阪秀史 会長）

広報をしたり、人集めるわけですから、それを受けて様々な準備をすると思うので、部屋が取れたとしても、すぐにできるというわけではないですよ。

1か月準備期間を設けるとかそういったことは考えないですか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

もちろん。なので、4月に関しましては、資料の中にも書いてありますが、例えば4月の末ぐらいを考えていますが、それが5月にずれ込んだ場合は、5月にずれ込んでしまうことがあるかもしれないとは思っています。

広報活動に関しましては、当日からできますので、実際3月にお話をし、その特集を組んでもらい4月にはもう載せていただいて、4月の末を迎えるということではできると考えております。

（倉阪秀史 会長）

はい。わかりました。

他の方はいかがですか。

（佐藤あい 委員）

今のお話で、場所の件も問題がないということではありましたが、ポップアップのショップとかで1週間という期間もまとめて取るという形だと、なかなか取りづらい印象が私あるのですが、それもそんなに期間をかけずにとることができるのでしょうか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

そうですね。実際に今の空きというところがHPに掲載されておりますので、会議室の予約を取るような感じで、空き状況はすぐにわかりますし、マルイさんに関しましては、1つの建物の中で何十ヶ所もスペースがあります。

（佐藤あい 委員）

効果的な場所とそうでない場所があるなと思いますが、2階だったらいいなとか、結構上の方もありますけどなかなか人の流れがないよねっていうものがあると思うので、どこでも空いてればいいのかっていうとそうでもないかなと思いますが、そのあたりはどうでしょうか。

（株式会社イデビュ 関根氏）

そこら辺は実際に私も会場を見てきた中で、やはり駅に繋がった2階と3階というところがそのターゲット層となる方も多いので、2階3階がいいなとは思っています。

その場所に関しても、実際今のところでは空きがあるというところは伺っていますので、この開催ができないということはないと考えております。

（佐藤あい 委員）

ありがとうございます。

（倉阪秀史 会長）

他大丈夫ですか。

それでは時間になりましたので、ここ

で終了したいと思います。ありがとうございました。

(申請者 退出)

(倉阪秀史 会長)

それでは、受付番号 2 の評価の入力と協議を行います。

(評価入力)

(倉阪秀史 会長)

それぞれについて意見交換を行いたいと思います。

【評価については非公開】

(倉阪秀史 会長)

続いて、ファーストステップ助成の審査に移ります。

受付番号 3 足立区にオリーブを増やそうについて、10 分程度お時間をとらせていただき、申請内容について意見交換をしたいと思います。

【評価については非公開】

(倉阪秀史 会長)

それでは、採択・不採択を取りまとめます。

受付番号 1・トップシーラー機に適合するバイオ素材の有効活用(開発)を用いたプラスチック減量と食品ロスの効果は採択、受付番号 2・足立区から世界へ広げる持続可能なもの作りは不採択、受付番号 3・足立区にオリーブを増やそうは採択となります。

委員の皆様、ありがとうございました。これで本日の審査は終了いたします。

審査結果は、事務局を通じて区長に答申いたします。答申書については、時間の都合もありますので、会長に一任いただく形で、よろしいでしょうか。

(異議なし)

それでは、私の方で答申書を取りまとめます。最後に委員の皆様から何かございますか。

(意見なし)

では次に、事務局から変更点があるということで事務局お願いいたします。

(吉尾文彦 環境政策課長)

はい。ご審議いただきありがとうございます。

次回からの変更点について、お時間をいただければと思います。資料を用意しておりますので、画面の方をご覧ください。

環境基金助成は、当然のことながら予算をいただいているところでございます。

今年度 12 月に、その減額の補正というものの議案をお認めいただいたところでございます。

その中で、減額をするというところではなく、もっと申請が増えるようにというようなところを、議会の方からご助言いただいたところでございます。

そういったところで審査会の審査項目の見直しをしていきたいというふうに考えてございます。と言いますのは、課題として、今回一般助成 2 つ、ファーストステップ 1 つでございましたが、低額のファーストステップと eco U-30 の採択率が低いというふうに書かせてございます。この令和 4 年から 6 年まで一般助成申請総数 7 件、低額申請部門の申請件数が 32 件という形でありましたが、低額の助成が 59.4%の採択率ということになってございます。4 割程度が採択にならなかったというところがございます。

そして不採択となった理由の最多が、最初の取り組みではありますが、波及効

果というところまで求めておりますので、この波及効果が乏しいというものが、1番多い理由でございました。

そうしたことから、今後の対応といたしましては、低額のファーストステップ、eco U-30については波及効果を要件とせず、参加者の環境意識の向上や継続性に焦点を当てて審査をしてまいりたいというふうに考えているところでございます。

こちらの方でよろしければ、7月予定してございます第二期から、この新たな基準でやってまいりたいというふうに考えておるところでございます。

事務局が考えているところで説明させていただきます。

(荒井広幸 環境部長)

環境部長です。補足をさせていただければと思いますけれども、私どもCO2の排出量削減というところ大きな目標の一つに掲げて取り組んでいます。

例えば、太陽光パネルの設置などについては結構直近の実績も伸びておりまして、区内で太陽光パネルを乗せていただけるお宅が増えている一方で、環境に対して意識が高まっているかというところ、世論調査の結果などを見ましても、なかなか思うように、数字が伸びてこないといったような実態がございます。

ですので、この環境基金で周りへの波及ではなくて、まずご自身がそこに興味を持って取り組んでいただける、そのきっかけということで、もう少しプッシュしていけないか、この環境基金を使って、お金があるんだったらやってみようというような、そのきっかけとして環境基金をさらに活用していきたいというところが狙いでございます。

今までは、その活動によって周りにもっと広げてくださいというところを1つ審査項目に入れていましたが、そうではなくて、環境基金を使ってくれる人が広がって、活動がそれぞれ多様性ではないですけど、人の数が増えていくというところが1つの狙いというところで考え、このような審査基準を提案させていただきたいということです。

事務局からは以上です。

(倉阪秀史 会長)

はい。ありがとうございます。

どんどん採択をしていこうということでございますが、今日の審査でもありますが、それでもちょっと採択しづらい申請もありますから、むしろそこはしっかり審査をして採択をしていくというふうになるかと思います。

何か質問等ございますか。

ないようでしたら、事務局から事務連絡をお願いします。

(吉尾文彦 環境政策課長)

どうもありがとうございます。こちらの件につきましては、文言等を調整させていただいて、また次回にご説明差し上げたいと思います。

審査委員の皆様におかれましては任期が3月までという形になりますので、今回が任期中最後の審査会になります。

2年間どうもありがとうございました。

次年度も引き続きお引き受けいただく方もいらっしゃると思いますので、その先生方にご連絡でございますが、次回第二期の開催は7月30日の午前中に開催する予定でございます。

詳細は開催1ヶ月前頃に案内させていただきます。

事務局からは以上でございます。

(倉阪秀史 会長)

ありがとうございました。他に何かコメント等ある方はいらっしゃいますか。

なければこれをもちまして、環境基金審査会を閉会します。ありがとうございました。

以上

(会議録署名)

足立区環境基金審査会 会議録記録署名員
(令和7年2月3日 開催)

会 長	倉原 啓史
署名委員	石毛 かなあき
署名委員 "	竹工 藤 あい